

未来へつなぐ港 ^{ゼロ} - 令和からの挑戦 -

相馬双葉漁業協同組合請戸地区青壮年部
小野田 隆一

1. 地域の概要

相馬双葉漁業協同組合請戸地区は、福島県沿岸のほぼ中央にある浪江町に位置している（図1）。浪江町は福島第一原子力発電所の目と鼻の先にあり、以前は2万人が暮らしていたが、福島第一原発事故（以下、原発事故）の影響で全町避難を余儀なくされた。現在は避難指示の一部が解除され、およそ1,100人が町に戻っており、徐々に再建が進んでいる。

2. 漁業の概要

東日本大震災（以下、震災）前は刺し網や船引き網など小型船による沿岸漁業を営んでおり、震災前の平成22年の水揚げは、コウナゴ、シラス等の浮魚やヒラメ・カレイ類等の底魚など、数量が2,360トン（図2）、金額が7億4,000万円であった。震災前の請戸地区の正組合員数は156人であったが、現在は125人まで減少している。漁船隻数は97隻であったが、津波によりほとんどが流失してしまった。徐々に漁船復旧が進んでいるが、震災を機に漁業から離れた人も多く、現在は29隻にとどまっている。

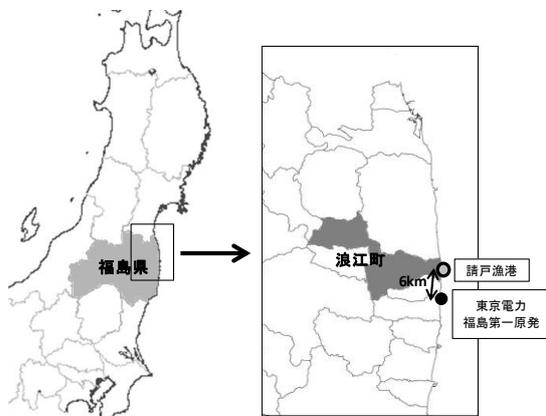


図1 請戸漁港の場所

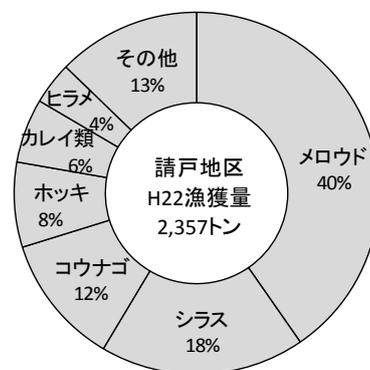


図2 震災前の請戸地区水揚量

3. 研究グループの組織と運営

請戸青壮年部は、現在12人のメンバーを中心に活動している。震災直後は皆県外などに避難し、バラバラの状況であったが、福島県内で試験操業が始まるにつれて、部員たちも港に集まるようになった。現在の主な活動はイベントによる産直活動、担い手の育成研修などである。さらに、平成26年に請戸底建網検討委員会を立ち上げ、青壮年部長が委員長となり、底建網の効果を検証する調査を実施している。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

もはや説明不要の出来事とも言える震災と原発事故は、請戸にも大きな被害をもたらした。請戸の集落は全て津波に押し流され、その惨状を確認する時間もないまま、原発事故の発生により私たちは避難を余儀なくされた。

その時は誰もが「請戸はもう終わった」と思った。住む家も、商売道具の船も、何もかも失い、町に自由に入ることさえできなくなってしまったのだから当然の感情である。それでも、心のどこかにわずかながら未練が残っていたのも確かである。代々私たちは漁業で生きてきたので、それを簡単に捨てられるほど強い気持ちは持っていなかった。

「このまま請戸の漁業まで失いたくない」

震災から時間が経って、徐々に自分たちが置かれている状況を冷静に考えられるようになるにつれて、どんどん漁業をやりたいという想いが強くなってきた。それは、福島に生きる漁師の多くが同じ気持ちだったと思う。このような想いが結実し、平成24年6月、沖合底引き網漁を対象に試験操業がスタートした。その後、平成24年7月に沖合タコゴ、平成25年3月に沿岸のコウナゴ漁も再開し、私たちは再び福島の海で漁業をできるチャンスを与えられた。震災前と比べ、請戸の漁師と青壮年部のメンバーは大きく減ってしまった。しかし、残ったメンバーは本気で漁業をやってやろうという気概を持った人ばかりである。

「請戸で漁業を続ける」

請戸の漁業を守り、未来へつなぐため、私たちは文字通り“ゼロからの挑戦”をするため立ち上がった。

5. 研究・実践活動状況及び成果

(1) 守るべき伝統

【請戸の漁業の灯】

試験操業は、出船日、日数、時間、場所などの操業方法を事前に地区検討委員会で取り決め、制約がある中で行われている。震災前のように自由な操業はできないが、“将来を真剣に考えなければならない”青壮年部がリードする形で、請戸も試験操業に参加した。

請戸漁港が位置する浪江町は、当初、全域に避難指示が出されていたため立ち入りが厳しく制限されていた。そのため、請戸漁港の復旧作業は他よりも遅れた。請戸の漁師は自分たちの港が使えないため、他の港に間借りする形で試験操業を開始した。肩身の狭い思いをしたが、他地区の仲間の漁師に協力をもらいながら、操業を続けた。

さらに、陸地の制約だけではなく、漁場の制約も加わった。福島第一原発から半径20km圏内は、放射能汚染された魚が漁獲される恐れがあるため、操業しないことが組合長会議で決まった。請戸の地先漁場はまさにこの20km圏内にほとんどが含まれるため、私たちが得意とする



図3 請戸漁港帰港式

漁場で操業ができなくなりました。それでも私たちは、どんな形であれ操業を続けることが大切だと考え、多くの制約や不自由を抱えながらも操業を続けた。

平成 29 年 2 月、ついに念願だった請戸漁港が完成し、私たちはようやく自分たちの港に船を戻すことができた（図 3）。さらに、その年の 3 月には浪江町の避難指示が一部解除された。操業海域については 20km 圏内の規制が続いていたが、試験操業の計画を決める地区検討委員会において、青壮年部長が「このまま規制を続けては、若い漁師が漁業を続けられない」と訴え続けた。その思いが通じ、平成 29 年 3 月のコウナゴを皮切りに、流し網やシラスにおいて、10km 圏内まで操業することが地区検討委員会で認められた。

「これでようやく地先の魚を獲ることができる」でも、肝心なものがまだ無い。魚を売る場所である。そのため、私たちは試験操業で獲った魚を原釜魚市場まで毎日陸送する日々が続いている。請戸漁港から原釜まで片道 50km 離れている。試験操業のたびに、魚を売るために往復 100km ほどの距離をトラックで運ぶ。震災前であれば、こんな労力をかけてまで魚を売るなんて考えられなかった。それでもやるのは、“請戸から漁業の灯を消したくないから”である。

【浪江十日市】

震災後、浪江町は役場ごと二本松市に避難した。二本松市は海から遠く離れているので、「もうこれから先、自分たちで魚を売ることはできないのか」と落ち込んでいた矢先、浪江町から“二本松市で十日市を開催する”ことが知らされた。十日市は浪江町を代表する伝統行事である。震災後に漁業ができなくなってしまった私たちは、せめて漁師の使命として魚のおいしさを伝えていこうと思い、参加することにした（図 4）。

当初、“自分たちの地元じゃない場所で、他人が獲った魚を売る”ことに、本当に参加する意味があるのかと自問自答したが、「今の状況の中で、やれる活動を精一杯やるのが大事だ」と気持ちを切り替えることにした。実際に十日市に参加してみると、海から離れた二本松市でも、請戸の漁師が売る魚を喜んでくれる人がいた。この時は他所から仕入れた魚だったが、魚を売る楽しさを実感した。



図 4 二本松市内開催の十日市



図 5 浪江町内開催の十日市

平成 25 年、試験操業が開始されると、ようやく自分たちの獲った魚を十日市で PR できるようになった。震災、原発事故の後、魚のおいしさに加え“福島魚は安全”という

ことを伝えていく必要があった。二本松市での浪江十日市開催が継続されていたが、私たちにとってはメリットもあった。それは、“県内の人たちが、福島魚をどう思っているのか”を知る機会になったことである。当然、良い意見も悪い意見も両方あった。ある程度きびしい意見があるのは承知の上であったし、それがむしろ、真剣に漁業と向き合う覚悟を持たせてくれるきっかけにもなった。まずは県内の人に安心して魚を食べてもらうのが大事だと思う。県内の人々が地元で獲れた魚を食べなかったら、これから先、自信を持って自分たちが獲った魚を売り込むなんてできない。

平成 29 年、浪江町の避難指示が解除され、震災後初めて地元浪江町で十日市が開催された（図 5）。そこで、自分たちが獲ってきたシラスやガニ汁を販売した。この時の浪江十日市には今までにないほどの来場者があり、ほとんどの人が請戸の魚を心待ちにしていたと言ってくれた。伝統行事の地元開催の威力をまざまざと感じた。

浪江町で十日市が再開され、自分たちの魚を売ることができるようになったことで、請戸の伝統の一つ取り戻すことができた。地元の温かい声に安住することなく、さらに前を向いて進んでいきたい。

（2）攻めの一手

【底建網の挑戦】

請戸の漁業の未来を考えたとき、今までやってきたことを当たり前にはやるだけではダメだと思った。なぜなら、震災を機に請戸の漁師の多くは港から離れた場所に住むようになり、漁労作業に多くの時間、人、手間をかけるのが難しくなっているからである。そこで私たちは、底建網に着目し、青壮年部のメンバーによる調査を実施することにした。

底建網は東北や北海道の各地で行われているが、福島県では漁業としての実施例がない新規漁法である。底建網は一度設置したら漁期中ずっと海中に入れておくことができるので、網仕事などの手間を大幅に減らすことができる。さらに、ヒラメ、カレイなどを活魚のまま水揚げできるので、鮮度も言うことなしである。請戸に当てはめれば、底建網は従来の刺し網に変わる漁法として、将来有望ではないかと考えている。

私たちは、青森県や北海道で底建網の操業方法を学んできた後、請戸の地先に底建網を設置し、調査という形で実践している。平成 27 年から調査を始め、以来、毎年調査を実施している（図 6）。調査は、コウナゴ、シラス、シラウオなどの船引き網を実施する時期の合間に行っている。漁獲物は表のとおりで、年や時期によってバラツキが見られるが、獲れた時は 1 回の揚網でヒラメ 200～300kg や、マアジが 100～300kg 入ったこともあった。試験操業と同時並行で調査を実施しているため、狙った時期や適した場所が定まらないなど、まだ検証すべき点もあるが、底建網の将来性に手応えを感じている。



図 6 底建網調査

このように、従来の漁業や伝統を守るだけでなく、新たな試みをすることで、請戸の将来の可能性が大きく広がるのではないかと考えている。

調査期間		H27.4	H27.11	H28.5～6	H28.11～12	H29.11～翌1	H30.11～12
揚網回数		2回	5回	6回	6回	10回	7回
採捕魚種 (kg)	ヒラメ	10	115	1,370	160	151	148
	アジ・サバ	0	607	208	85	112	23
	マダコ	0	45	0	0	30	130
	スズキ	0	0	0	0	3	150
	その他	26	209	190	116	259	252

(3) そして新たなステージへ

【請戸荷さばき施設の完成】

令和元年10月25日、待ちに待った請戸荷さばき施設が完成し、落成式が行われた(図7)。試験操業としての漁業再開、漁港の完成、それに続く大きな出来事である。この記念すべき日に合わせて、私たち青壮年部員は秘伝の請戸名物ガニ汁を作って来場者にふるまい、施設の完成を祝った(図8)。

この施設は浪江町が復興交付金により整備したもので、震災から実に8年半の年月を経て、ようやく実現にこぎ着けた。請戸荷さばき施設は、ただ元通りに復旧させたわけではなく、高度衛生管理対応の施設へグレードアップさせた。豊洲に代表されるように、全国的な時流として、今後水産物を扱う施設は高度衛生管理対応が必須であると考えている。

施設の基本計画を決める際には、行政や業者の言いなりになるのではなく、実際に施設を使う漁師が積極的に関わった。平成25年9月に浪江町による“浪江町の新しい水産業デザイン実現化事業”が立ち上がった。そこに請戸の漁師も参画し、青壮年部長もメンバーとして名を連ね、将来を見据えた話し合いを何度も行った。今までの私たちであれば、使い勝手だけを考えて、面倒な事は嫌がっていただろう。しかし、これからの時代は、生産から消費までをトータルで考えていく必要があると思っている。

施設の運用が軌道に乗れば、請戸の漁師が獲った魚は請戸で売ることができるようになる。現在は、原釜まで陸送するために他の地区よりも1時間以上前に漁を切り上げることがあったが、陸送にかかる時間の制約が無くなれば、その分操業時間を増や



図7 完成した請戸荷さばき施設



図8 落成式でのふるまい活動

すことができ、水揚げをもっと増やすことができるようになる。現状の試験操業で、請戸の水揚げ金額は震災前の4分の1ほどに回復したが、これから先操業日数を増やしていけば、さらに水揚げを伸ばすことができるだろう。前向きに操業の変革を行っていけば、今請戸に残っている漁師だけでも、十分にこの施設を運用していくことができると考えている。

全てがゼロになったあの日から歳月が流れ、令和の時代を迎え、請戸は新たなスタートを切る。請戸に明かりが灯されるようになる日は、すぐ目の前に迫っている。

6. 波及効果

(1) 新しい風

青壮年部は震災直後、みんな散り散りになってしまったのだが、日を迫うにつれて、離散した部員達が1人、また1人と帰ってきた。しかも、新たな技術、経験を身に付けて。かくいう私も、震災後は漁業を離れ、放射線の空間線量をモニタリングする仕事に就いていた。世間では“福島は危険”だという認識が広まっていたが、私自身はこの仕事のおかげで、除染すれば放射線量は下がることを知っていたので、“福島は安全”だと分かっていた。この経験があったからこそ、船に戻って漁業を続ける決心ができた。

震災がなければ、私たちはずっと中の世界しか知らなかったと思う。でも、外の世界を知れたことで、今まで見えていなかったことが見えるようになった。

また、震災後に新たに入部した部員もいる。彼らは、新入部員と言いつつも、よそで漁業の経験を積んできた経験値が高めの部員である。このように、外の世界を知る部員たちがうまく融合することで、活動が活性化していくことが期待できる。

(2) 町の活性化

請戸はもともと多くの住宅が建ち並び、漁業集落として栄えていた場所である。そこが津波ですっかり無くなってしまったわけなので、浪江町としてもダメージは計り知れない。

今回、請戸荷さばき施設が完成したことで、再び請戸が漁業の基地として動き出すことになった。港の近くには水産加工団地の整備が進められている。さらに、今年の7月浪江町内にイオンがオープンし、請戸で獲れた魚の販売が始まっている。オープン日には青壮年部員が店頭に立ち、請戸の魚の美味しさを多くの人にPRすることができた。

請戸で魚が回るようになり、さらなるにぎわいを取り戻すことができれば、請戸の漁業は浪江町再建の起爆剤になるだろう。

7. 今後の課題や計画と問題点

請戸の漁業を未来に残すための施設、港、人がそろった。今後はそれらをどのように活用していくのが重要であり、私たちのような若い青壮年部員が先頭に立って、真剣に考えなければならない。

また、請戸は福島第一原発から最も近い漁業基地になる。この特徴を生かすも殺すも、全ては請戸の漁師の行動一つにかかっている。地の利を生かして、唯一無二の請戸を創っていくために、私たちは全力で走り続ける。